
気になる、あの娘は英雄王！？

great

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になる、あの娘は英雄王！？

【Nコード】

N4730Z

【作者名】

great

【あらすじ】

第五次聖杯戦争の軍配はセイバーに上がった。そして敗れた英雄王、ギルガメッシュは座に帰す筈だった……。しかし、彼は座に戻ることもなくISの世界へと転生してしまう！？持ち前の慢心ぶりと新たに加わった不幸体質を胸に今、英雄王の新たな伝説が幕を開ける！？

プロローグ

聖杯戦争。

今回で五度目となるそれは、終焉を迎えようとしていた……。

辺りは混沌の闇に包まれている。

その混沌の中、騎士王と英雄王による己の全力を掛けた一騎打ちに決着がつく。

軍配は騎士王へと上がったのだ。

「憎らしい女だ……最後までこの我オレに刃向かうか……」

英雄王ギルガメッシュがセイバーの頬に優しくそつと触れる。
彼の表情は先程までお互いに殺しあっていた者のそれではなく、
父親がまるで愛いとしい我が子へと向ける様なそれであった。故に彼の
表情は美しかった。

「……………」

セイバーは何も言わない。しかし、彼女の瞳は真っ直ぐと彼を見
つめていた。

「だが、許そう……手に入らぬからこそ美しいものもある。」

「……………」

「ではな、騎士王。……いやあ……中々に楽しかったぞ」

そう言い残し、英雄王　ギルガメツシュは冬木の地から姿を消した。

(嗚呼、ああ盟友よ。エルキドゥ……この世界、中々捨てたものではないな)

彼はもう二度と会うことの出来ないであろう、盟友を胸に浮かべ消えていった。

この時、彼は己が座に帰すことを疑わなかった。

しかし、運命とは時に残酷で時に不思議なものである。

何故なら彼の予想は、木っ端微塵に碎かれるのだから……。

sideギルガメツシュ

(何故こうなった!?)

再び我が目を覚ますとそこには、随分と久しい温もり、聖母の温もりが感じられた。

それにしてもおかしい。我は確かに騎士王に敗れ、座に帰したはずだ。

なのに何故このような場所にいるのだ……?

薄く、ぼやけた視界に見えるは辺りが真っ白な部屋。……おそろく病院であろう。

それに、我を抱いている女の姿が嫌に大きく感じられる。

(それにしても……この女……我を無許可で抱くとは、よほど死にたいと見えるな。)

「あうあうあうあうあうあう(貴様、誰の許しを得て我を抱く)」

……今、我はなんと言った？

自由に言葉を発せず、困惑する我をよそに女は嬉しそうに微笑む。

「あなた、元気な赤ん坊ですよ」

は？ 赤子？ 誰がだ？ ……我は王であって赤子ではないぞ。

あと、どうでもよいがこの女、騎士王に似ているな。髪の色など瓜二つだ。

「どれどれ、アルトリア。俺にも娘の顔を見せてくれ」

そう言って声の主の方へ目を向けると、そこには

「あうあうあうあうあうあう(ぎ、雑種!?)」

騎士王のマスター、衛宮士郎がいた。(もちろん本人ではないが)

「うふふ、赤ん坊が怖がってますよ」

「そ、そんなことないぞ！ ……多分」

（違う！ 我は雑種を恐れている訳ではない！ ……いや、間近で見られるのは流石に我とてビビるが……）

結論からすると我は座に帰せず、転生したらしい。

つまり我は今、本当に赤子という訳か……。

しかしここで、雑種の声が脳内でリフレインする。

「 …… どれどれ、アルトリア。俺にも娘の顔を見せてくれ」

待て。雑種が父というだけでも虫唾が走るのだが、それよりも我が娘だと？

「君に似て将来は絶対この子は美人になるな」

「褒めたって何も出ませんよ？」

（娘……だと！？ 言われてみれば我の黒くて太い一物も無いな……）

神め……どこまで我を愚弄すれば気が済むのだ……。

「そつえば、アルトリア。この子の名前は決まったのかい？」

……我の名か……。下らん名を付けてくれるなよ。

「ええ、この子の名前はギルガメッシュ・レインハルト。古代ウルクの王とされる英雄王からこの名を頂きました」

「ギルか……。名前のせいで将来いじめられなきゃいいが……」

才、我を愚弄するか雑種!?

そう言っつて父は、我を抱き上げた。

「ギル……俺達はどうしても、やらなければならない事があるんだ。だから……お前をこうやって抱き上げるのもこれが初めて最後かもしれない。……こんな父さん達を許しておくれ」

「あなた……」

なんの事だ？

「ギル、お前はこれから日本へ向かう。そして、千冬の手で暮らすんだ。彼女ならきっと君の力になってくれる。……こんな方法しかとれない父で本当にすまない、親として君を危険な目に合わせる訳にはいかないんだ。」

「大丈夫ですよ。この子もきっと分かってくれますよ。……きっと」

そう言っつた母の顔は悲しみに満ちていたのだった。

プロローグ 2

Side 一夏

声が出なかった。突然の出来事に混乱していたのだろうか……。いや、そうじゃなかった……。ただ目の前の少女に、そのあまりの美しさに。

俺は、言葉を失っていたんだ。

何故俺、織斑一夏がこんな事を思っているかというと、事の顛末^{てんまつ}は数分前に遡る……。

数分前、千冬姉が高校から帰ってきた。

うん、そこまではいい。いつもどりの光景だ。

だが、決定的にいつもと違っていたのは千冬姉が、人っ子一人くらいなら余裕であるであろう大きさの、ダンボールを抱えて帰ってきた事だ。

「千冬姉、それ何？」

当然俺はその中身が何なのか興味湧いて、千冬姉に質問した。

「わからん。だが、差出人を見る限りでは良い予感はないな……」

千冬姉は面倒くさそうに、はぁ……と溜息をついた。

差出人は……衛宮士郎？

「ねえ、誰？ この人」

「……一応、私の恩師だ。一応な……」

「へえ……」

なんか千冬姉が遠い目をし始めたぞ。うん、これ以上の質問は止そう。

千冬姉がダンボールのガムテープに手を掛けようとする。だが、その手はテープを掴んだまま一向に動かないでいた。

「開けないの？」

「いや、開けると後悔しそうな気がしてな……」

「じゃあ、俺が開けていい？」

俺がそう言つと千冬姉がしばらく、何かを考えた素振りをしてからこう言った。

「一夏……今からでも遅くない。このダンボールを川に捨ててこよう」

「な、なにいつてんのさ千冬姉!？」

あの千冬姉をここまで挙動不審にさせるとは……。

一体このダンボールには何が入っているというのだろうか……。

「よし、一夏。この箱の中身はお前にやる。少し早いがお前が小学校に入ったときの入学祝いだ」

「いやいやいや。絶対にいらないよ」

俺の答えは間違っではないと思う。千冬姉がここまで嫌がるというのはよっぽどだ。

千冬姉が嫌がりそうなもの……何か面倒な物でも入っているのか？
……国家機密の重要データとか。

「何故だ？」

「何でも！」

「ふむ……仕方ない。一夏、開けるぞ」

「う、うん」

ようやく腹を決めた千冬姉は勢いよくビリビリとガムテープを破る。

すると、中に入っていたのは

「「箱？」」

なんと驚くことにダンボールの中にはさらに小さなダンボールが入っていた。

「よし、川に流そう」

「待って。早まらないで千冬姉」

俺は必死に千冬姉を説得する。

もしも、この中身が本当に重要データだったら、千冬姉が川に流したおかげで人類滅亡！

なんて事になりかねない。

まあ、あくまで『もしも』の話だが……

「おや？ ここに何か書いてあるな」

千冬姉がそう言って箱の隅に書いてある注意書き？ を指差した。

「あ、ほんとだ」

その注意書きの内容はこうだった。

『飼育についての注意点』

1 寂しくなると死にます。ご注意ください。

2 箸より重い物は持てません。ご注意ください。

3 過剰なストレスを与えると死ぬ恐れがあります。ご注意ください。
い。

4 基本うざいです。『ご注意下さい。』

5 実は努力家ですが、褒めると調子乗ります。『ご注意下さい。』

6 餌は一日に3食与える必要があります。『ご注意下さい。』

7 ご飯を抜いたりすると一週間くらい機嫌が悪くなります。『ご注意下さい。』

8 アホの子です。『ご注意下さい。』

9 寝相悪いです。『ご注意下さい。』

10 最初の内は舌が肥えすぎてゐる為、一般のご飯は受け付けませんが、
腹がへると何でも食べます。『ご注意下さい。』

11 友達が中々出来ない可哀想な子です。『ご注意下さい。』

以上の注意を守って飼育下さるようお願いします。』

……嫌な予感しかしないのは俺だけだろうか……………。

「ね、ねえ千冬姉生き物でも入ってるのかな」

「……………」

千冬姉は頭をかかえたまま、無言で頷いた。

「じゃ、じゃあ開けようか」

「ああ、致し方あるまい」

そう言っつて千冬姉が2つ目のダンボールのテープを剥がした。

すると、中に入っていたのは

そして、現在に至る。

金色？ 違う。

黄金？ 違う。

可愛い？ 違………わないが、そんな一言で目の前の少女を表現するなどありえない。

………そんな、安価な言葉では表現しきれない程の美しい髪と顔。

いや、神々しいほどのブロンドの髪や、天使のような寝顔もそうなのだが、この少女は存在全てが神々しかった。

10年程の俺の人生の中でもこんなに美しい少女などにはあった

事が無い。

否、あるいはこれから俺が歩む人生の中でも一生会うことが出来ないだろう。

「千冬姉、この子だね？」

俺は箱の中で気持ちよさそうにスヤスヤ寝ている女の子を指差した。

「本名……ギルガメツシュ・レインハルト・衛宮。前に会ったのは、たしか5年程前か……」

「知り合いなの？」

「ああ、恩師の娘で……。うざいガキだったのを覚えてる」

「？　なんで親はこんな子を手放したのさ？」

当然の疑問だろう。こんな可愛い子を親が簡単に手放すのだろうか？

もし、俺が親ならこの子を絶対に手放したりしない。ずっと傍に居たい。そう思うのが当然だろう。

「分からん。我が恩師、衛宮夫妻は確かこの子を産んでから行方が不明になったのだがな……」

「なんだよそれ……」

自分と似た境遇の少女へと再び目を向ける。

自分達と同じ、『両親に捨てられた境遇』の少女。

何故かこの少女となら上手くやっていけそうな気がした。

「どうする一夏。私としてはこの少女を家に迎えたいと思うが、お前の意見はどうだ？」

「もちろん良いに決まってるよ。……それにこの子を一人にする訳にもいかないしね」

「そうか……お前がそう言ってくれて助かった。こいつの両親には、返しても返しきれない恩があつてな……」

そう言つて千冬姉は少女の肩を揺さぶる。すると少女は真紅に染まった、まるで紅玉のような瞳を開いた。

そして、少女は起き上がり左右をキョロキョロして辺りを見回した。

その姿はまるで小動物のようで

「可愛い」

し、しまった！ つい思っていた事が口からでてしまった。

されど、今更訂正しようとの後の祭りである。

千冬姉など、クスクスと笑っている。

しかし、当の彼女はそんなことは気にも止めず、薄いピンク色の唇を、まるで春に咲く美しい桜を思わせるようなほのかで上品な色の唇を開いた。

「ふえ……こ、ここはどこだ？ おのれセバスとマリアめ……我を
ダンボールなどに入れおつて……あの老執事とメイドには、後でた
っぷり賤けをせねばな……」

「ヤバイ……。この子声も可愛い……。まあ、言ってる事はどうか
と思うが。」

彼女に見惚れている俺を見て、一度咳払いをした千冬姉が少女の
方へと目を向け言った。

「ギル……久しぶりだな」

すると彼女の不安そうな顔が一気に、パアツと明るくなる。

「おお！ 千冬ではないか！ 久しいな5年振りか？ お互いに積
もる話も」

「パアアアーン！」

彼女は千冬姉に色々と言おうとしていたが、彼女の発言は途中で
遮られた。

「そう、千冬姉が振りかざした辞書によって。」

「い、いたいではないか千冬！ 我が何をしたというのだ」

泣き目になって千冬姉を上目使いで睨む、ギルガメッシュことギ
ル。

千冬姉を呼び捨てで呼ぶとは随分な勇者もいたものだ。

「目上の者には敬語を使え。愚か者」

「フン……目上の者に敬意を表すのがこの国の作法ならば、貴様が
我に敬意を表すのが道理であろう」

「ほう……いつからお前はそんなに偉くなったのだ？」

「我は生まれながらにして英雄王。つまり、この世に生を受けた時
からだ！」

腰に両手を当てポーズを取る彼女は無い胸を張り、そう宣言した。

とは言っても、高校生の千冬姉と自分と同じくらいの年頃である、
小学１年生サイズのギルとは話にならない。

そんな彼女を心底うざそうに見下ろして再び辞書を構える。

「わーわーっ！ ま、待て、は、早まるな千冬！」

「千冬？」

千冬姉は今度は顔に黒い笑みを浮かべながらギルを見つめた。

すると彼女は自身の着ているゴシックアンドロリータ、通称ゴス
ロリのスカートにギョッと握って涙目になりながら、つまり、半泣
きになりながら震える声で言った。

「千……冬……さん」

ああ、千冬姉、こんな小さい子を泣かせて……。 (とはいっても一夏とは同じ年なのだが)

我が家に新しく加わった小さな英雄王が『魔王千冬』に屈服した瞬間だった。

パアアアン！

「い、いたっ！ 何すんのさ千冬姉！」

お、俺はギルと違って叩かれるような事は言ってないぞ！

「ほう、身に覚えがないというのか？」

千冬姉の目はギラギラと光っている。

この人は読唇術でも持っているのか？

「安心しろお前の考えている事くらい直ぐ分かる。姉弟だからな」

……なんでぞ。

第一話 クラスメイトは全員女（前書き）

I am bone of my sword .
体は剣で出来ている。

Steel is my body , and fire is
my blood
血潮は鉄で、心は硝子。

I have created over a thousand
blades .
幾たびの戦場を越えて不敗。

Unaware of loss .
ただ一度の敗走もなく、

Nor aware of gain .
ただ一度の勝利もなし。

Withstood pain to create weap
ons waiting for one's arrival .
担い手はここに独り剣の丘で鉄を鍛つ。

I have no regrets . This is the
only path .
ならば、我が生涯に意味は要ず。

My whole life was " unlimited blad
e works ."
”

この体は、
”無限の剣で出来ていた”。

第一話 クラスメイトは全員女

Side 一夏

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rはじめますよー」
ショートホームルーム

黒板の前でにっこりと微笑む副担任こと山田先生。

身長はやや低めで、生徒のそれとはほとんど変わらない。

分かりやすく言えばギルより少し大きいくらいだろうか。

そして、服はサイズが合っていないにのただぼっとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒緑眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ……というより背伸び感がするんだが、そう思うのは俺だけなんだろうか。ふと、一つ後ろの席の少女、ギルに声をかけようかとも思ったがやつぱり止めた。声をかけても無駄だと思って、思いとどまる。なぜなら

「んんんんっつ！ んんんんんっつっつー！ （放せー！）」

後ろの席に座るギルは口にガムテープを、両手足には何やら物騒な手錠が椅子に絡められており、話すこともままならない状態だからだ。一体だれがこんな事をしたのだろうか……？ 俺が遅刻ギリギリに教室に入ったときには、もうこの状態で、助けようにも助けられない。手錠やガムテープならまだしも机に『餌を与えないで下さい』と書いた紙が張ってあるから驚きだ。ジタバタと泣き目で手錠を外そうと必死に抵抗しているギルを見ると若干、不憫に思える。

(ギルにここまで酷く当たれる人物は一人しか思いつかないのだが……)

頭に浮かんだのは人類最強の姉君、千冬姉だ。

(いや……でも、千冬姉がこのIS学園に居るはず無いか……)

俺は深く考えるのをやめた。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応は無い。

それもその筈、この教室には人類で唯一、一人のISに乗れる男である俺と、かなり残念な超絶美少女ギルガメッシュがいるのだから……。

俺の存在はテレビなどで報道されていたからまだしも、今の状態のギルを見た生徒はきつと、いや、かなり驚くだろう。傍^{はた}から見れば『は？ 何のプレイ?』と思いたくなるのも当然だ。事実、俺もそう思った。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちよつとつろたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕は無い。

なぜか。

簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろよろこぶべきところだ。

だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺一人という点だ。

(これは……想像以上にきつい……)

自意識過剰ではなく、本当にクラスメイトほぼ全員からの視線を感じる。

だいたい、席も悪い。なんで真ん中しかも最前列なんだ。めちゃくちや目立つ上に否が応でも注目を浴びるじゃないか。俺はちらりと窓側に座る篠ノ之箒の方へ目をやる。

「……………」

おお、神よ

我を見捨てたか

……うん、ギルならそう言うだろうな。

それにしても薄情な幼馴染だ

窓の外に顔をそらしやがって。これが六年ぶりに再会した幼馴染に対する態度か？

……いや、もしかして俺、嫌われてるんじゃないか？

「　　くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいつ!?!」

いきなり大声で名前を呼ばれて声が裏返ってしまった。

案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきて、俺はますます落ち着かない気分になる。

「あ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。自己紹介してくれるかな？ ダ、ダメかな？」

気が付くと副担任の山田先生がぺこぺここと頭を下げていた。

「いや、あのそんなに謝らなくても……ってどうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶対ですよ!」

そ、そんなに詰め寄らんでも……いいでしょうっ。

俺はしっかりと立って後ろを振り向く。

(うつ……)

皆の視線がもろに当たる。

あ、ギルよ、手錠が外れないからって泣くんじゃない。あとでアイヌ買ってあげるから。

俺は意を決して声を出す。

「えー……えっと、織斑一夏ですよろしく願いします」

「「「……………」」」

しばしの沈黙が流れる。

「……………」

だらだらと背中に流れる汗を感じる。どうしたらいい、何を言え
ばいいんだ。

こうなったら世界の中心で愛でも叫んでみるか？ あ、そういえ
ば世界の中心ってどこだ？

やっぱり、アメリカかな？ いや、そもそも地球は球体だから

どうでもいいことだけが頭のなかでぐるぐるまわる。

『 ずっと俺のターン！ 』

……嫌なターンだなこれは……………」。

というか、何で俺はここにいるんだ

？

第一話 クラスメイトは全員女 1 - 2

「side 一夏」

「うー、寒っ……………」

二月の真ん中、俺は中学三年生。受験のまったただ中だった。

「なんで一番近い高校の、その試験のために四駅乗らなきゃいけないんだ……………」

しかも今日、超寒いじゃねーか……………」

俺はギルが昨晚、夜なべして作ってくれたマフラーを落ちないようにと、首に掛けなおした。

昨日の飯時に、気象情報で雪マークが出たのを見てこのマフラーを編んでくれたんだっけ……………」

あいつも普段はアホの子のくせに、こういう時はしっかりしている。

『病は人間の大敵の中の一つだ。受験当日に風邪を引いた、などという言い訳は聞かんからな』

だ、そうだ。

あいつも、たまにはいいことを言う。それにしても……………」

（あいつと同じ学校……………行きたかったな……………。）

俺は一度深い溜息をついた。

それもその筈、入試ギリギリまではいいつも、俺が行くであろう私立『藍越学園』を志願していた。

しかし、先週の土曜、ISの開発者であり、篝の姉の篠ノ之東博士から一本の電話が入った。

〜一夏 回想〜

『もっし〜！ あたしだよ、ちーちゃん。愛しの東さんだよ。ふんふん、あ、ちーちゃんまた、おっぱい大きくなった？ わかるよ〜ちーちゃんのことなら何でも！』

受話器から漏れたデカイ声が聞こえてくるが、どうやって、電話越しでそんなことが分かるのだろうか？

受話器をとったままの千冬姉が面倒そうな顔をしている。

『東か……、切るぞ。そして死ぬ』

『ま、まってよ！ ちーちゃん！ 今日は大変なお話があるのですよ〜 ギルちゃんのISに、つ・い・て』

『何？』

千冬姉の眉が一瞬だけ、ピクツと動いた。

一体、何を話しているのだろう。先程よりも電話越しの声が小さかった為よく聞き取れなかった。

『ふっふっふっ、ついに完成したのだ！ ギルちゃんの専用機ゲート・オブ』

『束！ いい加減にしろ！！』

うおっ！ び、びっくりした……。

千冬姉の大きな怒鳴り声が織斑家の廊下に木霊した。

それにしても、どうしたというのだろうか……。

こんなに怒っている千冬姉は久しぶりだ。

確か前はギルが、ギル特製カレーを盛り付けてるときに、転んで中身をぶちまけた時以来だろうか……。

その後ギルが泣いて謝ってたっけ……。

いや、あの時も確かに怒ってはいたが、今日のはまるで違う。

あの時の怒りには優しさも含まれていたが、今の千冬姉の表情からは苛立ちしか感じられない。

『ど、どうしたのさ？ ちーちゃん』

『あ、いや……すまない、動揺していた。許せ、束』

『うっん、いいよ別に、で、どうしてそこまでしてギルちゃんをISに乗せたがらないのさ？』

『あいつには、危険な目にあって欲しくない……。たった二人しか』

いない、私の大切な家族なんだ……』

『ISの事、ギルちゃんに言ったの?』

『言えるわけないだろ……。あいつなら絶対にISに乗りたがるだろっから……』

『ちーちゃん、それは単なるエゴだよ。家族だったら、見守ってあげなよ。彼女の未来をさ』

『……わかった。ISのこと、話してみることにする』

〜回想終了〜

つてな感じでギルはIS学園に行く事になったとさ。

ISに乗るのを何とか説得して止めさせようとしてた千冬姉に、

『王たる我オレに退けと申すか。大きく出たな千冬』

とか言っつてギルがボコられたのは言っつまでもない。

「えーっと……あれ? これ、どうやって二階行くんだ?」

数分後、試験会場に着いたものの……。

いかん。迷った。というか、何でこんな分かりにくい構造をしているんだ。

それになんだ、このデザインは！ いかにも常識的に作らない俺カッコイイ的な感じが漂っている。

「ええい、次に見つけたドアを開けるぞ、俺は。それでだいたい正解なんだ」

おっと、いいところにドアが。ちょっと入りますよ？

「あー、君、受験生だよな。はい、向こうで着替えて。時間押してるから急いでね。ここ、四時までしか借りれないからやりにくいったらないわ。まったく、何考えて……」

部屋に入った途端、神経質そうな三十代後半の女教師に言われる。どうも忙しいのか、俺の顔も見ずにぱつぱつと指示だけして出て行った。

（着替え？ はて、今日日きょうじつの受験は着替えまでするのか？ ああ、カンニング対策か。大変だなあ、どこの学校も）

そう思ってカーテンを開けると、奇妙な物体が鎮座していた。

なんていうか、『お城に飾ってある中世の鎧』だ。しかも、忠誠を誓う騎士のようにひざまずいている。

知っている、これは『IS』だ。

次世代兵器と、なりつつあるマルチフォーム・スーツ。

でも確か……

「男は使えないんだよな、たしか」

そう、女にしか使えない。女以外には、この機会は反応しないのだ。

だから、目の前にあるのはマネキンと同じだ。何もしない、できない、ただの物体だ。

（そもそも、こんな物さえ無ければギルと同じ高校に行けたのに……。）

俺の胸にはその事での苛立ちが沸々と込上げてきた。

それに、女にしか使えないなんて、とんでもない機械だ！ とも思う。

「この！ 淫乱マシンめ！」

俺は今胸にある感情を己の足へと込めて蹴飛ばした。

すると、本来は男では起動しない筈の“こいつ”が

第一話 クラスメイトは全員女 1 - 3

Side 一夏

「……………」

えーと。

状況を再確認するぞ。今俺は高校一年生、入学式当日。自己紹介の真っ最中。

目の前に広がるのは二十九名の女子。後ろには我が麗しの、おバカさんことギル。

それと多分半泣きの山田先生。……あ、半泣きなのはギルも一緒か。

どうでもいい閑話休題終わり。

で、自己紹介が終わるに終われない俺。何せ目の前の女子は『もつと聞きたいなあ!』という期待に満ちた視線を俺に送り続けている。

おい、箒、ギル、幼馴染のよしみで助けてはくれまいか。

あ、箒のヤツまた目そらしやがった。

薄情者め。感動の再会はどうした。そんなのはないけど。一方ギルは

『この手錠やガムテープを、は・ず・せ!』

と、潤んだ目で訴え掛けて来る。

仕方ない……死なばもろともだ！

俺は一回、山田先生に「すみません」と声を掛けてから、ギルの後ろに回りこみ手錠や、ガムテープを外そうとする。

するとギルはくすぐったいらしく、少し暴れる。すると、当然ギルの軟らかい双方にも触れてしまっわけ……

（うおっ！ やわらかっ！ 小さくてもこんなに軟らかいのか、女の子の胸ってのは……）

うんうん、余韻、余韻と

ギルが泣き目で睨んでくる。

「んんんんっっ！ （もう少し丁寧にやらんか！）」

「あ、ああ、悪い悪い」

俺はガムテープと手錠を取ってやった。

「一夏！ 今からでも遅くない！ 逃げるぞ！」

そう言ってギルはホームルームの最中にも関わらず、ドアの方へと走っていく。

「レ、レインハルトさん!？」

山田先生の制止も聞かずに。

どうした？　とうとう気でも狂ったか？

「逃げるって、誰から？」

「そんなこと決まっているだろう！　未来から来たあの“最強の”サイボーグに決まっておろう！」

「　　ほう……誰がターミネーターだと言っただ？　レインハルト？」

突如！　開いてあるドアの向こうから聞き覚えのある声が聞こえて来た！

ギルはギギギツという効果音と共に首を恐る恐る振り向く。

パアッンッ！

「いたっ　　！」

哀れギル。ターミネーターに捕獲されたか。

黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。

組んだ腕。狼を思わせる鋭い釣り目。ターミネーターこと我が姉、千冬姉だ。

そして、ギルの首根っこを掴み、千冬姉は彼女を引きずりながら教卓の方へと向かう。

引きずられていくギルはじたばた暴れて抵抗するが、我が家のタ
ーミネーターの前には、成す術すべがない。

「は、放せ！ 千冬！ 我オレにこのような仕打ちをしてどうなるか覺
えているよ！」

千冬姉は暴れるギルに構う事無く、黙々と教卓へと進む。

そして、ギルの席まで来ると再び手錠やガムテープなどを付け直
した。

……やっぱり、千冬姉だったのか。

いや、待て待て待て。なんで千冬姉がここにいるんだ？
職業不詳で月一、二回ほどしか家に帰ってこない俺の実姉は。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

お、俺達家族でさえ聞いた事の無い声だ。

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

さっきの涙声はどこえやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいく
らいの声と視線で、

担任の先生へと応えている。あ、はにかんだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使いものになる操縦
者に育てるのが仕事だ。」

私の言う事はよく聴き、理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

なんとということでしょう。劇的ビフォーアフターもびっくりだ。先程までの優しい口調はどこえやら……

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく

「キヤーー！ 本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から」

「私、お姉さまの為なら死ねます！」

……おいそこ、命を粗末にするんじゃない。

「で、挨拶も満足にできんのか、お前は」

千冬姉が凍て付いた眼差しを俺に向ける。

辛辣。 極めて手厳しい。

「いや、千冬姉、俺は」

パンツッ！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの知識を半月で覚えてもらう。」

その後実習だが、基本動作は半月でしみこませる。いいか、いいなら返事をしろ。

よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

いやいやいや待ってやれよ。一人挨拶してないのがいるだろ。

ほら、そこに。

俺が目を向けた方向には、『ちよ、待たんかい！ 我が挨拶してなかつた！』

と、必死にジェスチャーしているギルがいた。

はぁ……と溜息をついた千冬姉が、嫌々ギルの手錠やテープを外す。

「……ついに我の出番が来たか！」

ギルはめっちゃはしゃいでるな、まあ分からんでもないが。

自身の机の上に乗ったギルは腰に手を当て堂々と宣言する。

「我が名はギルガメツシュ！ 人類最古の英雄王なるぞ！」
「ジャーン！」と、効果音が鳴りそうなほどドヤ顔のギルとは対照的に静まり返る教室。

一体、さっきの盛り上がりはどこへやら……。

みんな一様に『そうだね』『同じ名前だね』という反応だ。

そんな雰囲気を見かねた千冬姉は、

「コイツの名はギルガメツシュ・レインハルト・衛宮。餌を与えるな、以上」

とか言った。

……ギル……ゴメン。こんな鬼畜な姉の弟でゴメン。

そう思っていると、千冬姉はこちらを睨んでくる。

はっ、まさか！ 読唇術！？ いや、千冬姉の場合は“独身術”か！？

パアンツ！？

……だから、なんでさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4730z/>

気になる、あの娘は英雄王！？

2011年12月21日00時56分発行